

【1. 概要】

- ・水稻の温湯消毒では種子伝染性のばか苗病に対する効果は低く、生物農薬(トリコデルマ アトロピリデ水和剤)を利用することで効果を補完
- ・2002年に専用消毒機の販売が開始され、2016年には県内16JA中14JAが導入
- ・ばか苗病に対して、温湯消毒後の種子の最適な保管条件を検討

【2. 実践内容】

(1) 取り組みの背景、経緯

- ・滋賀県では、化学合成農薬や化学肥料の使用を半減した「環境こだわり農業」による水稻栽培を推進しており、水稻の種子消毒法として「温湯消毒法」の普及は必須である
- ・温湯消毒は、ばか苗病に対する効果が比較的低いことが課題であるため、生物農薬の利用によりこの問題解決に取り組んだ

(2) 普及拡大に向けたポイント、成功要因

- ・温湯消毒後にばか苗病に効果のある生物農薬を処理することで、効果を補完した
- ・温湯消毒後の種子を十分に風乾し、低温低湿度で保管することで、ばか苗病のまん延を防げることを明らかにした

【3. IPMの推進による効果、得られた経験】

- ・県内16JA中、14JAで温湯消毒が実施され(2016年2月現在)、環境こだわり農業に利活用されている
- ・ばか苗病に対しては、生物農薬の利用が進んだ。
- ・産地では、温湯消毒後に低温低湿度で保管するよう、指導が進んでいる



化学農薬に依存しない種子消毒体系の概念図